

インド・カーストの変化と動き

—準拠集団理論に基づく分析—

小山義則

I サンスクリット化理論

従来よりインドのカースト体系は、閉鎖社会における社会制度として見られてきたが⁽¹⁾、独立以降、カースト研究および野外調査の拡充とともに、カーストの変化が論じられるようになっていった。とくに52年に出版されたショリニワース (Srinivas, M. N.) の論文は、カースト変化の研究にはすみを付ける結果となった。彼はこの論文の中で、サンスクリット化 (Sanskritization) という概念を導入し、次のように定義した。

下位カーストは、一世代か二世代の内に菜食主義や禁酒主義を採用し、儀礼や神々をサンスクリット化すること、「ヒラルキー」の上位地位に昇ることが出来た。簡単に言うと、できる限りブーリーの慣習・儀礼・信仰を受け入れ、ブーリーの生活様式を採用することは理論的に禁じられるにもかかわらず、ひんぱんであったと思われる。ある種のヴェーダ儀礼がブーリーの二つの再生カーストに限られるのや、

「バラーミン化」というより、この過程は「サンスクリット化」と呼ばれる。⁽²⁾

しかし後に、彼は「地域の現象のみならず各地の現象もこの理論で分析できる」と見て、模倣されるモデルをブーリーのみならず、再生族 (dvija)⁽³⁾ 全体に広げ、あるいは地方の支配的カースト (dominant Caste)⁽⁴⁾ および一生族 (ekaja)⁽⁵⁾ であるショードラ⁽⁶⁾ にまで拡大した。この共時的分析視角の拡大とともに、通時的分析視角も取り入れ、インド史の中でカーストの変化を分析する弁証法的分析を通じて歴史的再構成をも目論んだ。しかし分析視角の拡大に伴って、個々の事象の特異性が無視されるきらいが生じた。しかも模倣されるモデルを一旦は広げながらも、結局ブーリーに局限する傾向を捨てないため⁽⁷⁾、50年代以降様々な批判や修正を求める意見が噴出したのである。

個々の事象の特異性を主張するものの中でも、マジュムダール (Majumdar, D. N.) は脱サンスクリット化と脱儀礼化 (de-Sanskritization, de-Ritualization) を提唱し、バルナバース (Barnabas,

A. B.) が「ブラーハンゼ(Brahminisation)⁽⁹⁾」、チャナナ(Chanana, D.R.) が「インド化(Indianization)⁽¹⁰⁾」、ラオ(Rao, V.K.V.) は脱ブラーハン化(de-Brahminisation)⁽¹¹⁾を提唱して、各地の事象を分析した。またシヨリニワース批判も登場し、シン・ワラン(Cishwaran, K.) が「サンバクリット化」のヴァルナ(Varna) モデルへの偏執を批判⁽¹²⁾、シャルマ(Sharma, K. L.) は「サンバクリット化」論における変化の單一性を批判した。イシ・ワランおよびシャンマラの批判は部分的なものであったが、シン(Singh, Y.) はシヨリニワースの理論を整然と体系的に批判した。彼の説を項目別に要約すると、(1)模倣されるモデルは、サンスクリット型からヒンドゥー型・ムスリム型⁽¹³⁾、あるいは部族型まで変化に富んでいる。(2)単に下位カーストは上位カーストの生活様式を採用するだけでなく、地位の向上を目指している。(3)サンスクリット化は文化の神聖な面のみを模倣するのではなく、世俗面での模倣採用もある。(4)サンスクリット化の意味・脈絡はモデルごとに異なるのみならず、同一モデルでも地域的多様性がある。(5)サンスクリット化といっても、非サンスクリット伝統を無視しては、過去・現代のインドにおける文化変容の多くの面は説明できない。

（6）サンスクリット化の影響はあらゆる地域に一様に及んでいるわけではない。シヨリニワースのような動きは、経済資源や権力を求める集団や階級の間の敵対・闘争といった構造的緊張から生じることもある⁽¹⁴⁾。これらの批判に対し、シヨリニワースは「サンスクリット化」を複雑多岐な諸概念の束であるとして、批判の矛先をかわそうとしたが、内心批判の多さにたじろいだり、概念の放棄を考えた時すらあった。またシヨリニワースの理論は分析視角に関して、その後二派に分れ、構造機能分析と歴史的・弁証法的分析は和解されぬまま今日に至っている。たとえばハーバー(Harper, E. B.)は「サンバクリット化」を伝統内の変化しうる要素間で理解する解釈カテゴリー(interpretative category)として捉え、スター(Staal, J.F.)は歴史的再構成を否定せず、其時分析が到達しうるのは中間概念(meta-concept)にやめるとする⁽¹⁵⁾。

ともあれ、シヨリニワースの「サンバクリット化」理論により、様々な理論が登場したことは事実であり、シヨリニワースがカーストの変化研究に大きな貢献をしたことは否定できない。しかし彼の試みが遠大であればあるほど、個々のカーストの動きの独立性は捨象されてしまい、彼自身の概念をも修正させる結果となつたのは皮肉なことであった。むしろ70年代以降は、カーストの動きの個別性・独自性を考慮する理論が登場して來た。

II 準拠集団理論

「準拠集団理論」(reference group theory)は、初めマートン(Merton, R.)によく提唱された概念である。要約すると社会に生きる個人は何らかの形で集団に属し、その集団の中で成員として成長しながら、期待された役割を遂行するため準拠枠を設定し自己を同化することに努め、その結果(役割達成)社会における一

定的地位を確保する。しかしその一方で自己の所属する集団（所属集団・内集団）の中に居ても、個人に完全なる満足が得られないかたり、十分な期待を伴う役割を配分されなかつたりした時には不満が生じる。とくに個人が所属しない集団（非所属集団・外集団）に目を向けて不満が羨望に変わった時、この相対的な不満を解消するため、個人は比較の準拠枠を作つて、積極的に外集団の行動・価値に合わせようとする。つまり準拠集団理論とはこの過程を分析する理論であり、「他人が評価と自己評定の過程で、他の個人や集団のもの価値や基準を比較のための準拠枠としている場合、その決定因と結果を体系化すること」⁽¹⁹⁾に外ならない。¹ ラーントは複数の準拠集団を提起したが、実際には(1)慕謹する準拠集団と(2)互いに支持し合う準拠集団の二類型を取り上げたにすぎない。しかし類型化の試みはリンチ (Lynch, O.M.) に継承され、内容も明確にされた。

リンチは準拠集団を次の三類型に分類した。(1)模倣の準拠集団 (reference group of imitation) ……ある集団の行為様式・基準・価値が正しく適切なものとして準拠を作ろうとする集団により採用され、行為や信仰において模倣されるなど。(2)同一視（帰属意識）の準拠集団 (reference group of identification) ……個人が自己を同一視（同化融合）する時の非所属集団や、血口はその集団への帰属を求める。(3)否定の準拠集団 (negative reference group) ……ある集団の行為・態度・価値が対立関係にある他方の行為・態度・価値に依存している状態を表わし、両集団が敵対関係にあ

ることを示す。ラオ (Rao, M.A.S.) は、否定の準拠集団に対立の準拠集団 (opposition reference group) を付加した。

ラオは自己に「相対的剝奪論」(relative deprivation theory)を展開し、この理論で社会運動のより満足な原因と変化の方向を説明できるところ⁽²⁰⁾。そしてこの理論の不可欠な要素として対立の準拠集団を導入した。彼によると、社会運動 (social movement) が、紳士的な順応により社会的に默認される動き (social mobility) とは異なり、公的にも私的にも競争・闘争関係を惹起する動きである⁽²¹⁾。それ故この運動の渦中にある集団は法的権利や経済的資源を剝奪されると、あらゆる面で特權ある集団の慣習や生活様式を単に比較の準拠枠として採用し模倣するだけではなく、経済・教育・政治・宗教などの面で独自を享受する集団を攻撃する。この攻撃対象が対立の準拠集団である。剝奪された集団は特權ある集団と闘争関係に入るのみならず、剝奪された分野を取り戻して自らの集団レベルを高めようとする⁽²²⁾。

ラオは今日のカーストの動き (Backward Classes Movements) と呼ばれる⁽²³⁾を社会運動と見なし、その帰結した性格がい、変形的な運動 (transformative movement) と表す。これは資源・権利・特權の様々な割り当ての体系と権力の伝統的な配分における中位の構造的変化を意味し、宗教も含めた生活の様々な領域における上位カーストや階級の独自を攻撃するなどが特徴である⁽²⁴⁾。

以上今までショーリーワースの「サンスクリット化」理論のあ

おじやれいそねくの批判を一部述べ、その理論に代わりうるるものとして「準拠集団理論」を取り上げた。以下の「準拠集団理論」に基いて各地で起つてゐるカースト変動を分析して見よう。

III 各地のカーストの変化

事例1 オリッサ州のボード (Boad)

ベイリー (Bailey, F. G.) によると、ボード・カーストはシッパラ村 (Bisipara) 人口の 67% を占める、昔モフア樹 (*mohua-gassia latifolia*) の花から単純な技術を用いて酒を醸造していた。オリッサでは前世紀の70年まで自由に酒を造ることが出来たが、70年以降ロンド・マーク (Kondmal) 丘陵の南の酒店は閉鎖され始め、やがて北部にも及んで、今世紀の10年頃には酒の販売も禁止された。禁止後は醸造販売から退き、農業や他の小規模な季節交易業に就き始めた。酒類の販売がうまみのある商売であることも手伝い、ボードは醸造販売禁止までにロンド (Konds) から農地を集積し、収入の10%を農業で得るまでになつた。そして富を蓄積して戦士カーストに次ぐ富裕層となり、戦士カーストおよびラーミンの生活様式を採用し始め、村パンチャヤート (village panchayat) を通じて禁酒・菜食主義の徹底を成員に課した。新たな身分を要求する一方で、新たに設けた規制に従わぬ成員を排除する動きが生じ、彼らとの間で共食・通婚関係を断つなどになつた。改革に成功した一部成員らは自らをボロ・スンディ (Boro Sundi) と称し、他カーストからの食物を拒んだ、自カーストの優位性を確立しよ

うとした。そのためラーミンの下に位置する戦士カーストからの食物受理を拒んだ。富の蓄積と禁止事項の徹底さが彼らの身分を高めさせ、村パンチャヤートでの発言権も増した。⁽²⁶⁾

本来不淨ラインよりも上に位置したことも幸いして、ボード・カーストの改革は成功したと言える。ボードはラーミン・戦士カーストを模倣の準拠集団と見なし、彼らの生活様式を採用したが、上位カーストからの反発や抵抗はなく、ボードの動きは黙認される結果となり、ラオの言う社会運動には入らない。

事例2 ウッタル・プラーデシュ州のチャウハーンズ

ローウィ (Rowe, W. L.) によると、昔のカーストはヒンディ語のノン・ロン (Non-Lon 塙) から派生したノニヤース・ロニヤース (Noniyās-Loniyās) と呼ばれ、製塩業・硝石造りが伝統職であった。18世紀の後半製塩業が英國政府の専売業となると、ノニヤースは土木事業・レンガ加工業へと転職した。しかしつつ多くの者はタクルス (Thakurs) の下で強制労働 (begar) を強要され、一日一食の報酬で耕作や土木事業に駆り出された。元来は飲酒と豚飼育を常とするため、半淨ショードラ扱いされていた。一八九八年にシング (Singh, L.M.P.) が政府管轄の土木業の請け負い業者となつて、蓄財すると、所属カーストのラジプー (Rajput) 身分を要求して、ラジプート宣伝組合 (Shri Rajput Praeāi Sabha) を組織した。この組織は第一次大戦まで田立った活動は何もしなかつたが、今世紀の20年頃アーリヤ・サマーン (Arya Samāj) の運

動が勢いを得てくると、ノニヤースは24年シャンガイブル(San-ghapur)の集会で、再生族の象徴である聖紐(Janeo)を着用する議案を採択した。そして25年にはノニヤースがクシチャトリア中でもつとも由緒あるラジポート・クランの一つチャウハーンであることを証明する神話を出版した。36年のセーナブル(Senapur)集会では、ブラー・ミン司祭を招いて聖紐授与の儀式を執行させた。またチャウハーン・ラジポートとしての新たな身分を獲得するため、カースト規制を強化し、下位カーストとの共食を禁じ、タクールスからの食物受理を禁じた。またカースト神(Bachila Devi)への子豚の供儀を、果物・花の供物に変えた。しかし上位カースト、とくにタクールスからの反発は激しく、セーナブルのタクールスはノニヤースを襲撃し、彼らを殴打して聖紐を引き裂き、ノニヤース全体に25ルピーの罰金を課した。第二次大戦中にも再度ノニヤースは聖紐を着用し始めたが、上位カーストからの反発はなかった。⁽²⁸⁾

事例3 ウッタル・ブラー・デシュ州の牧人(Goatherds)
マリオット(Mariott, M.)によると、キサン・ガリ村(Kishan Garhi)の牧人は今日同村の儀礼的ランクでは13位に位置するが、

昔は19～24位に位置する壺屋カーストと同じカースト・ブロックに属していた。牧人は今世紀の30年代に破産したジャーツ(Jats)地主から土地を買い求め、土地からの富を蓄積して、身分向上に努めた。他カーストからカッチャ食物(Kacca)⁽²⁹⁾の受理を拒み、カチ(Kachi)農民レベルに地位を引き上げた。洗濯屋や床屋カーストからのサービスを求めて、ブラー・ミンによる脅しにも係わらず、余分な賃金を支払って彼らを雇い続けている。また牧人はパッカ食物(Pakka)を受理しないブラー・ミンの排除に努め、同村の最古リネージで貧しいブラー・ミンを説得して、秘密裡に食事に招いた。こうした努力のおかげで他のブラー・ミンも牧人の祭宴に訪れるようになった。

この牧人はオリッサ州のボード・カーストのように他カーストと闘争関係に入ることなく、食物分配⁽³⁰⁾の操作と経済力を基に暗黙裡に身分向上に成功した。

事例4 カルナータカ州のホレールス(Holerus)

ハーバー(Harper, E.B.)によると、ホレールスは土地なしの農業労働者で、不可触民であった。昔は奴隸扱いされ、奴隸制が前世紀の30年代に公的に廃止されてからも、マルナード(Mainad)ではしばらく存続した。一八七八年の飢饉がひどく最近まで、ホレールスはハビク・ブラー・ミン(Havik Brahmins)の下で終身の労働奉公をさせられていた。結婚式を挙げたホレールスはハビク家へ行き、「ミルク飲み儀式」がその奉公契約であった。主人(Odeyanuと呼ばれる)からミルクと贈物(食物・衣服・儀礼物

など）を受けて、ホレールス（Maneālu ふ名前を改め）はハビク

に忠誠を誓い、家庭召使として、畜舎の清掃や屍体の処理に当つた。日々の労役に対し男性は2シールズ（Seers. 4ポンム）の米、女性はその半分を支給されたが、主人の家から逃亡するといは出来ず、逃亡すればパンチャヤートで厳罰に処された。しかし実は78年飢饉でディバルス（Divarus）へレーバイカバ（Hale-paitas）への上位カーストが小作人になり、ホレールスの仕事も軽減されたのである。「ムルク飲み儀式」も今世紀の40年頃からハビクによる搾取の契機と見なされ始め、カースト・パンチャヤートを設けて、くだんの儀式追放に乗り出し、56年を最後に行われなくなっている。また彼らは身分の向上に努め、成員がハビクのための葬式用の薪を集めたり、屍体処理や畜舎清掃を行うことを禁じ、牛肉を食べる習慣も放棄させた。結婚式を挙げる時はハビクから援助を受けないようになると、嫁側に支払う嫁資（Meneālu が働く2年分の額）を引き下げる自衛策も講じた。ハビクもホレールスの仕事の怠慢を行業を煮やし、終身雇用の代わりに賃金払い雇い始め、またホレールスとの関係を改善するため農地を小作に出すなどして、現在2人のホレールスはハビクから農地を借りるに至っている。⁽³¹⁾

ハーバー自身が68年の論文で「成功していない運動」と表題したように、ホレールスの身分向上は全般的に見てあまり進んでいない。彼らにとっての準拠枠が明確になつていないと、対立の準拠集団となりうるハビクと、対等に渡り合えるほどの経済力

・結束力に欠けていたためである。

事例5 ケーララ州のイーラワー（Izhavas）

ラオ（Rao, MAS）によると、イーラワーは州人口の26%を占める酒造りカーストである。酒造りの外に、小作や農業労働者として農業に就く者もあり、またアーチルヴェーダを学習して医者（Vaidyan）や占星術師（Kaniyan）になる者もある。しかし伝統職との関係が深かつたため、不可触民扱いされ、様々な差別を受けた。汚れのタブーのため「ハーバー」（Nambutiri Brahmins）に対し20~30フィートの距離を保たねばならず、寺院や参道・井戸・タンクの使用も出来なかつた。また靴や傘の使用も禁じられ、女性は上半身裸で水壺を腰で運ぶよう規定され、搾乳も禁じられていた。19世紀に教育機関が発達し、上位のナヤール（Nayars）が公務職に大挙して進出すると、イーラワーの間でも教育熱が生じ、名家出身のヴェーラ（Vela）とペルピ（Palpu）は85年と96年に差別撤回を求める請願書（Izhava Memorial）を藩王に提出した。⁽³²⁾このような状況の中でカリスマ的リーダーのクル（Sri Narayana Guru Swamy）が登場した。彼は父・オジより語学・カーダを学び、成人して放浪している間に師（Thaikat Ayyavu）へ知り合ひ、ヴァーダンタ、ヨーガを学び、ダルマスームラの解説書（Atmopadesha Satakam）を著した。カーストがヴェーダ学習の根本要素でないと宣伝し、出生だけで司祭職に就くハーバーを攻撃し、やむには下位カースト（Cherumas, Pulayas）との共食關係を奨励して、彼の開いた庵（Ashrama）と上位カースト（Pulayas）

Parsials) の少年を弟子入りさせ、ロッカに雇ひだりした。そしてイーラワー集団の改革にも乗り出し、伝統職を捨てさせ、動物供犠を禁止し、禁酒食食主義を浸透させた。また贅沢な慣習——Talikettukalayanan (Tali 紐結び)、Tirandukuli (初潮儀礼)、Pudikudi (妊娠儀礼)——を廃止させた。これらの改革を徹底するため庵・寺院 (Ashrama, mutts) などを建て、各地に彼の布教を促進するヨーガ (Yogam) が生れた。⁽³³⁾

イーラワーの改革運動はカリスマ的リーダーの出現により具体化するとともに、宗教色を濃くした。グルはイーラワーにヒューリタン的生活様式を送るよう迫り、自堕落のブラーーミンを攻撃した。

事例 6 ヴィッタル・ブラーーデンショ州のジャータブ (Jatav)

リンチ (Lynch, O. M.) によると、アグラ市の人口¹⁷を占めるジャータブ (旧称はチャーマルやジャータブはヤーダブのなまり) は皮細工を伝統職とする不可触民であった。今世紀の20年代に伝統職の皮革業が製靴産業に発展すると、ジャータブは財を築き、アーリヤ・サマージの影響で、全市にバンチャヤートを設けて、身分の向上に努めた。牛肉食を禁止し、聖紐を着用して、24年にはクシヤトリヤ身分を証明する本を出版した。20年代には高等教育を受けた人々を中心にジャータブ青年連盟 (Jatav Yuvak Mandali) を作り、カーストの結束と政治意識の覚醒を訴えた。けれど36年には指定カースト (Scheduled Castes) カーストにジャータブとして登録され、40年代にはアンベードカル (Ambedkar,

B.R.) の全インド指定カースト連合に触発され、支部作りが起り、また56年にはアンベードカルにしがつて仏教徒に改宗したりした。61年のセンサスでは仏教徒は二二六一人にのぼり、市人口の3%を占めた。かくも58年にもアンベードカルの意向をくんで共和党 (Republic Party) を結成し、59年の選挙で54議席中17議席を確保した。その後はムスリム連盟と協定を結び、選挙戦に臨むことになった。⁽³⁴⁾

製靴産業に基づく経済力を發揮して、ジャータブは身分向上に努めたが、彼らの比較的の準拠地はぐるぐると変わった。30年代までアーリヤ・サマージが模倣の准拠集団で、聖紐を着用しクシャトリヤに同一視されることを望み、ブラーーミンを否定してきたが、40年代後半より指定カーストに同一視され、かくには改宗したり政党作りへと転進した。リンチによるとジャータブがアンベードカルに結びつくのに、彼らの神話とアンベードカルの創作した神話の類似性が強く働いているという。

事例 7 ヒマーチャル・ブラーーデンショ州のコーリー (Kolis)

この地方のカーストは、内の者と外の者 (andarke औ baharke) に大別され、コーリーは農民であっても外の者に属し、寺院に入れず不可触民 (achut) とも呼ばれた。しかし下位カーストとは異なり、浄カーストとして扱われ、ブラーーミンや床屋のサービスを受けていた。このように彼らの身分はあいまいで、上位カーストに食物を配分できない一方で、浄カースト者が秘密裡に食事に招かれることがある。相対的に豊かな経済状態とアーリヤ・サマ

ージの影響で、コーリーは身分向上に努め、ラジパートの生活様式や慣習を模倣し、ラジパートから軽蔑される慣習（兄弟姉妹の交換婚、婚賀の支払い、未亡人の相続など）を廢止し、聖紐を着け始めた。一九一三年に藩王の指揮下でブラー・ミンを招き、聖紐授与式と淨化儀礼を執行してもらつたが、何の効果もなかつた。41年のラホール高裁で「被抑圧階級」（Depressed Classes）のリストから排除されたものの、67年の選挙では一転して「後進階級」への編入を迫り、保留選挙区からコーリー候補を出馬させ、クントリニア身分を放棄した。³⁶

コーリーは初めラジパートの生活様式を模倣して、クシャトリアに同一視されることを望んだが、ラジパートおよび他カーストからの支援もなく、60年代以降は後進階級に同一視されるなどになつた。

事例⑧ タミールナード州のナダール（Nadars）

ハードグレーブ（Hardgrave, R. L.）によると、昔シャナール（Shanars タミール語のシャル Saru ヤシ搾りから派生）と呼ばれたナダールは、ナダン（Nadans）地主の下でヤシ樹の栽培とヤシ酒造りをし、ショードラ扱いをされた。上位カーストとの間に距離を保つこと、ブラーハン（Nambudiri Brahmins）に対して 36 フィート、ナイール（Nairs）に対しても 12 フィートを規定された。傘や靴・金の装飾品を着用することも禁じられ、女性は上半身裸で腰で水壺を担ぐよう要求されていた。一六八五年にキリスト教（プロテスチント）が伝来すると改宗者が現われ、一八四九

年にはティネベリ（Tinnevelly）で4万人の集団改宗があつた。また43年から67年にかけ職を求めて、一五〇万人のナダールがセイロンへ渡り、その地で財を成し帰還した者は、農業や商業に就き出した。一方早くから交易業に就いていた者は、通商の中継地に街を開き、独自の組織（Uraimurai）を作つて、基金を集め寺院や学校を建設した。60年代になるとこれら商人はクシャトリア身分を要求して身分の向上を計つた。男性はブラー・ミンの服装（dhuti）をし、女性は鉛の耳輪を宝石・貴金属の耳輪に変えた。さらに未亡人に白サリーを着せ、再婚を禁じた。土葬を火葬に、婚資をダウリーに替え、結婚行進には肩カゴ担ぎ人を雇つた。一八九一年のセンサスでクシャトリアとして登録されたものの、上位カーストからの抵抗は激しく、60年代よりナダールが寺院立ち入りを求めて運動すると、各地で衝突が起り、99年のシバカス（Sivakas）の暴動ではマラバール・カラール・ペラン（Maravars, Kallars-Pallans）との暴徒（Brahmins·Vellalas·Maravars 地主の傀儡）がナダールの村々を襲撃し、八八六軒の家屋を破壊し、21人を殺害する事件が起つた。しかし反面、教養ある人々が中心に、93年カースト集団の組織（Nadar Mahajana Sangam）を作り、ナダール（Nadar, V.P.）議長の下で活動が活発となり、一九三七年にはラージャ・ガーベラチャリ（Rajagopalachari, C.）首相を通じて寺院の開放を勝ち取つた。そして50年代より一転して後進階級にナダールを編入するよう政府に迫る運動を展開した。³⁷

ナダールは富の蓄積を通じて身分向上に努め、当初ナダンを否

定し、ブライミンやキリスト教徒の生活様式・慣習を模倣し、ク

シャトリアに同一視されることを望んだが、ナダール全体の後進

性から後進階級に編入されるよう方針を変えた。

事例9 グジャラート州のペティダール (Patidars)

ボロック (Pocock, D. F.)によると、ペティダールは農業を伝統職として、前世紀のセンサスではカンビス・ベーベズ (Kanbis, Bhahas—Kutumbi 世帯主より派生)として登録されていた。彼らは戦士起源を主張していたが、上位カーストはシードラ扱いしていた。しかしうガール期および英國統治期には、ペティダールの勤勉・誠実さが買われて、官僚や灌溉整備・改良農業の請け負い業者になる者も現われた。一八九九年—一九〇一年の飢饉で多くのペティダールは東アフリカへ渡り、その地で財を成した者も出た。一九三一年にはセンサスでペティダールの名が承認され、これを機にクシャトリア身分を要求して、ラジポートの生活様式を模倣した。アヘンの愛飲・バラード文学が流行し、系譜 (Vahinavaca) が高く評価され、作成され始めた。しかし今日ではバニア (Banias)との付き合いを重視し、彼らとの食物交換を行つている。それに伴つて身分もヴァイシャ身分を要求するようになった。

というのも多くのペティダールは農業以外に交易も営んでおり、これらの職は法典でヴァイシャ職とされているからである。⁽³⁸⁾

彼らは名譽よりも実利を選ぶ傾向があり、クシャトリア身分を

要求した時も、聖紐を着用しなかつた。模倣の準拠集団をラジポートからバニアへと変えるとともに、身分要求もクシャトリアか

らヴァイシャへと変更した。

事例10 ケーララ州のブライヤ (Pulayars)

アレクサンダー (Alexander, K. C.)によると、昔ブライヤは上位カーストの奴隸で、上位カーストとの間に一定の距離を保つた。ブライミン・ナイールに対し 64 フィート、カマラ (Kammalas) に対し 40 フィート、イーラワーに対し 30 フィートであった。もちろん寺院にも入れず、女性は上半身裸で、金銀の装飾品も付けられなかつた。しかしイーラワーの間でグルの改革が始まると、その影響はブライヤにも及び、アヤンカリ (Ayyankali) はヨーガム (Sadhuana Paripalanam Yogan) を組織し、改革に乗り出した。流血供犠を花・果実・ギー (ghee) の供物に変え、惡靈信仰をヒンドゥー神のシバ・ラーマ信仰へと変えた。また一夫多妻婚を単婚に、婚資をダウリーに変えるとともに、離婚率を引き下げるなどにも成功した。さらに商人・小地主・教員などに転職し富裕となつた者は、上位カーストの家に招かれても、食後皿を洗うよう強要されず、上位カーストとの間に通婚もあり、3人のブライヤがイーラワー女性と、1人がナイールと、1人の女性がカマラ男性と結婚している。

イーラワーのグルがブライヤとの共食関係を奨励したように、ブライヤはイーラワーに触発され、改革に乗り出し、模倣集団はイーラワーであった。

事例11 ベンガル州のテーリ (Telis)

シャンヤル (Sanyal, H.)によると、一八七一年のセンサスで、

既にテーリ（油榨りが伝統職）は交易・農業についてティリ・シャハ（Tili Shaha）と名のり分裂し始めた。また商品の卸売りや小売りに転職したり、銀行家・商店主・金融業者になる者もあり、カルカッタの商人貴族（Abnijatis）に名を連ねる者も現われた。富を築いた者の中に改革の動きが起り、一七七二年から八五年にかけベンガル総督府の執事・秘書（Banian）になったナンディ（通称 Kanta Babu）ナンヨーデラ（Nabashakh Shudra）⁽⁴⁰⁾身分を要求して、バラーミン司祭に浄化儀礼の執行を依頼した。この計画は失敗したが、彼は净シヨーレにふさわしい儀礼や慣習を採用し、女性に鼻環（nath）を付けさせた。彼の意志は子孫のナンディ（Manindachandra Nandi）を受け継がれ、一九三一年のセンサバでティリが水を受領であるカーベル（Jalachoraniya）⁽⁴¹⁾、テーリが受領できないカーベル（Jalavayavaharya）⁽⁴²⁾別表記されると、彼は両方を統合するベンガル・ティコカーベル連盟（Bangiya Tili Jati Sammilani）を作った。彼はこの組織を通じて両方の通婚を奨励し、バラーミン司祭からの儀礼サービスを得るように働きかけた。

ベンガルが特殊なヴァルナ体系を有するため、ティリが求めた

同一視の準拠集団はバラーミンではなくシヨーデラだった。

事例12 カルナータカ州のワダール（Waddars）

バーント（Bhatt, C.）によると、ワダールは土木業・石工職を伝統職として、一八八一年センサスでは放浪・無宿の部族民として記載されていた。今世紀の初め頃から、彼らは伝統職を放棄し始め、

都市に移住して、清掃業に就き出した。しかも他カーストがこの職に就いていないことの手伝いで、彼らはビンドゥー社会に融合し、下位カースト（Korachas-Koramans-Lambanis）のカースト。プロットと同列に扱われ、不可触民となつた。しかし一九三〇年代より教育を受けた若干の人々は、ベンチャヤートを設け、身分向上に乗り出した。ネズミを食べるなどをやめ、女性に腕輪とアラウスを着用させ、結婚式の日取りをヒンドゥー方式に合わせ、床屋・洗濯屋・司祭のサービスを受けるまでになった。40年にはワダール連盟（Chitradurg District Waddars Sangha）を作り、44年のダバナゲーレ（Davangere）の集会やワーテーヤ・ラージャ（Wadeya raja）⁽⁴³⁾と共にヒャトリア身分を要求したが、結局ボーヤズ・ボーリス（Boys-Bhovis ラベーバーラタ物語のみ）⁽⁴⁴⁾に決まり、政府も承認した。しかし一転して50年代より、ワダールは指定カーストに編入されようとする訴え始め、62年の選舉でムニチンハバ（Munichinhappa, D.）⁽⁴⁵⁾が当選すると、落選者がワダールの指定カーベル・ワダールを指摘して、法廷闘争にもかこんだが、67年ニジャリングガッパ（Nijalingappa）首相はワダールを指定カーストに編入し、ワダールの要求は成就した。⁽⁴⁶⁾

ワダールは初め部族民として、ビンドゥー社会での地位に不満を抱き、改革に乗り出す。彼らにとっての模倣の準拠集団（バートは規範的・肯定的準拠集団と呼ぶ）は上位カースト（Vokkali-gas-Lingayats-Brahmins）⁽⁴⁷⁾、否定の準拠集団は同一トロッカのカーベル（Korach Korama-Lambani-Jadamali-Madiga）やある。

同一視の準拠集団はクシャトリアから指定カーストへと変わった。

結論

今まで論じてきたケースを整理すると、H・P州1例、U・P州3例、グジャラート州1例、ベンガル州1例、オリッタ州1例、カルナータカ州2例、ケーララ州2例、タミールナード州1例と、やや南部に偏っている。各カーストの伝統職を見ると、農業に就いているのは、コーリ・ペティダールの2カーストで比較的地位も高い。一方酒造りはボード、ナダール、イーラワーで、皮革業はジャータブ、召使いはホレール・プラーヤ、他に搾油業のテーリ、牧畜業、土木業のワダール、製塩業のチャウハーンらがおり、これらのカーストはシュードラか不可触民で地位も低かった。同じ職種でも扱われ方は地方で異なり、イーラワーが不可触民である一方、ナダールはシュードラであった。

しかしこのカーストはヒンドゥー社会の底部に位置していたため、改革に乗り出して比較の準拠枠を作り、他カーストの生活様式を模倣したり、同一視されることを望んだり、対立したりした。表で示すと次のようになる。注目すべきことは、當時流行していた思想が多大な影響を及ぼしており、北部ではアーリヤ・サマージとそれに呼応して聖紐着用の運動が起り、南部ではキリスト教とグルの思想がそれに匹敵する。単に上位カーストの生活様式を模倣し、このカーストに同化するのでなく、自らのカー

ストをどこかに位置づけようとして同一視の準拠集団が形成される。この折クシャトリア身分への要求例（5例）が圧倒的に多く、一面ヴァルナへの同定化⁽⁴³⁾も考えられるが、それだけではない。第一に一九四一年以降センサス当局がカースト・リストを排し、指定カースト・指定部族のみのリストを作成し、53年に後進階級と改名したが、このリストに記載されたカーストに対し、公務職・入学および議席での約30%を保留する政策を取ると、各カーストはクシャトリア身分をあつさり放棄して、指定カースト・後進階級への編入（4例）を要求し始めた。第二に模倣の準拠集団と同一視の準拠集団との間に相異があり、全般的に模倣した集団への同化融合というより、自カーストの独自性をヒエラルキーの上で確立しようとする一種の自己査定の過程で、模倣の準拠集団を利用したと考えるべきであろう。この過程で主張された改名（7例）や神話創作はその表われである。

次に否定の準拠集団と対立の準拠集団に目を向けると、この違いは微妙で否定の準拠集団が対立の準拠集団に転化することもありえる。これは身分向上に努めるカーストと上位カーストとの距離にも関連し、向上に努めるカーストの身分がかなり低く、性急な改革を推進した時には、上位カーストの逆鱗に触れることとなり、ホレールはタクールに、ナダールはプラーミン・ヴェーラララに襲撃され、流血事件を引き起した。他方下位カーストの中にカリスマ性を帯びたりーダーが出現し改革に乗り出すと、上位カーストの反応も多少異なり、イーラワーのグルの開いた庵にはナ

Caste (Old Name)	Reference Group of Imitation	Reference Group of Identification	Negative Refrence Group	Opposition Reference Group
1) Boro Sundi (Boad)	Warriors, Brahmins			
2) Cauhans (Nonijas, Loniyās)	Arya Samaj	Cauhān Rajputs		Thakurs
3) Goatherds			Brahmins	
4) Holerus			Havik Brahmins	
5) Izhavas	Puritanism			
6) Jatavs (Camars)	Arya Samaj	Kshatriya → Scheduled Castes (44)	sanatani Brahmins	Nambutiri Brahmins Nayars
7) Kolis	Arya Samaj, Rajputs	Kshatriya → Backward Classes (67)		
8) Nadars (Shanars)	Christian, Brahmins	Kshatriya → Backward Classes (52)	Nadans	Shudra, Brahmins, Vellala, Maravars
9) Patidars (Kanbis)	Rajputs, Banias	Kshatriya → Vaishya		
10) Pulayas	Izhavas			
11) Tiliis (Telis)		Shudra		
12) Bhovis (Waddars)	Vokkaligas, Lingayats Brahmins	Kshatriya → Scheduled Castes (51)	Koracha, Koroma, Lam- bani, Jadamali, Madiga	

ヤーラ・田嶋和 (Aiyappan Pillai) ル・ラーマ・ラーム・王身和 (Krishna Sastri, T.T.) が兼ね入った奴。¹ 一派體がれたりす。²
 カースト連合 (Caste Sabha) 作りが各地で進んでおる、小ぢ
 なサブ・カースト内での改革めらむ、結束してより大きな単位で
 の改革が起つてこゆる事だ。たゞえは、アーダールは一九〇八年に Patidar Yuval Mandal (アーダル族)、マハーラジの獨立と眞誠、³
 ナダールは一八九五年 Madar Mahajana Sangam (組織)、⁴
 余議派の領袖カマラ・ナダル (Kamaraj Nadar, K) が教派と並んで、⁵
 ハーラーは一九〇二年から Sri Narayana Dharma Yogan を組織し、⁶
 24年の Vaikom Satyagraha で成功し、⁷ これが主な
 これらの連合は州領域を越えんだが、全インド人口の二〇〇四五百萬
 ル・ヤーラ (Yadavs) は一九一四年に全國規模の連合 (All-India Yadava Mahasabha) を組織し、選舉宣伝による公開討論会を開催し、⁸ 6年の議員數だけでも一八人の立法議会議員 (MLAs)
 ふる人の中央議会議員 (MPs) を選出する一大政党となりた。⁹
 じつもうにカーストの動かは時代状況に応じて刻々と変化して
 おり、一九三一年まだヤンナバ当局が改名請願を受理したる
 ゆゑ、カーストの改名運動が主流を占めた。しかし41年以降
 は保留政策の下で、指定カースト・後進階級への編入運動が主流
 となり、政治との結びつきが一層濃厚となりてくる。それが、政
 治より現代的手段を駆使すれば今日のカーストの動かは、「キ
 ベクリッカ化」への伝統的方法や思想であるといふのである。

スルジバ、今後は益々政治との係わらでカーストが醸じる事で
 るだらん、やへだなさればカーストの動かは理解しなべくな
 レン。

註

- (1) たゞえは、ムニーハーはカント教義と既離れたイン
 ブル人を導いて、(Weber, 1967 *The Religion of India, Free Press*, pp. 121-123)
- (2) Srinivas, M. N. 1952 *Religion and Society among Coorgs of South India*, Clarendon Press, p. 30
- (3) Srinivas, M. N. 1962 *Caste in Modern India and Other Essays*, Asian Publishing House, p. 43
- (4) Srinivas, M. N. 1962, *ibid*, p. 43
- (5) Srinivas, M. N. 1966 *Social Change in Modern India, California Univ. Press*, p. 7
- (6) Srinivas, M. N. 1977 "The Channing Position Women," *Man*, vol. 12 pp. 221-238
- (7) Srinivas, M. N. 1966, *op. cit.* p. 25
- (8) Majumdar, D. N. 1958 *Caste and Communication in an Indian Village*, Asian Publishing House.
- (9) Barnabas, A. B. 1961 "Sanskritization," *Economic Weekly*, vol. 5 pp. 613-618
- (10) Channa, D. R. 1961 "Sanskritisation, Westernisation and India's North West" *Economic Weekly*, vol. 15, pp. 409-414

- India", Srinivas, et al (ed.) *Dimensions of Social Change* in India, Allied Publishers Private Ltd. pp. 21-33
- (12) Ishwaran, K. (ed.) 1970 *Change and Continuity in India's Village*, Columbia Univ. Press, p. 8
- (13) Sharma, K. L. 1980 *Essays on Social Stratification*, Rawat Publications, p. 73
- (14) Singh, Y. 1977 *Modernization of Indian Tradition*, Thomson Press, pp. 7-11
- (15) Srinivas, M. N. 1966, op. cit. p. 61
- (16) Gould, H. A. 1961, "Sanskritization and Westernization", *Economic Weekly*, vol. 15, p. 950 (945-950)
- (17) Singh, Y. 1977, op. cit. p. 10
- (18) Staal, J. F. 1963 "Sanskrit and Sanskritization", *Journal of Asian Studies*, vol. 22, p. 266 (261-275)
- (19) Merton, R. 1957 *Social Theory and Social Structure*, p. 234 (機運論「社会理論と社會構造」p. 215)
- (20) Lynch, O. M. 1970, "The Politics of Untouchability," Singer & Cohn, (ed.) *Structure and Change in Indian Society*, Aldine Publishing Company, pp. 209-240.
- (21) Rao, M.A.S. 1979 *Social Movements and Social Transformation*, The Macmillan Company, p. 245.
- (22) Rao, M.A.S. 1979, ibid, pp. 242-256
- (23) Rao, M.A.S. 1979, ibid, p. 249.
- (24) 楽義立'後進階級な賤民カーブー・賤民階級のぶんづ
レ'、他の母國カーブーは Other Backward Classes ルノ
般みふる。刹帝利等は社会・經濟・教育面での後進性が認

ムバ" ニーケーの關係等がなだる。仏教は、賤民カーブ
ト・賤民階級をもつての差別化した他の母國カーブト
Backward Classes ルノウルアルマリ。

(25) Rao, 1979, op. cit. pp. 254-255

(26) Bailey, F. G. 1971 *Caste and Economic Frontier*, Manchester Univ. Press.

(27) ムニニヤ・チャーラは 1-2世紀前後ハマハーヴ Swami Dayananda Saraswati ルノウル 離説など、彼はかく「一々の連
友達が世間で「アーリア人人々の精神的高潔なる恒心」人々
がむかへてアーリアの精神的高潔なる恒心」人々
の如き。

(28) Rowe, W. L. 1968 "The New Cauhāns : A Caste Mobility Movement in North India", Silverberg, (ed.) *Social Mobility in the Caste System in India*, Mouton Publishers, pp. 66-77

(29) ムニニヤ・チャーラは「アーリア人人々の精神的高潔なる恒心」人々が世間で「アーリアの精神的高潔なる恒心」人々
の如き。彼はかく「アーリアの精神的高潔なる恒心」人々
の如きが「アーリアの精神的高潔なる恒心」人々。
Marriott, M. 1970 "Caste Ranking and Food Transactions", Singer & Cohn. (ed.) *Structure and Change in Indian Society*, pp. 133-172

(30) ムニニヤ・チャーラは「アーリアの精神的高潔なる恒心」人々が世間で「アーリアの精神的高潔なる恒心」人々
の如きが「アーリアの精神的高潔なる恒心」人々。(Marriott, M. 1970 "Caste Ranking and Food Transactions", Singer & Cohn. (ed.) *Structure and Change in Indian Society*, pp. 133-172)

(31) Harper, E. B. 1968 "Social Consequences of an 'Unsuccessful' Low Caste Movement", Silverberg, (ed.) *Social Mobility in the Caste System in India*, pp. 36-65

- (32) ハルの教義がある階層運動の説明は、赤壁出川「祭社
カルトカルチャル運動」『民族』1978, No.
9, pp. 58-76
- (33) Rao, MAS 1979 Social Movements and Social Trans-
formation, The Macmillan Company, pp. 21-122
- (34) Lynch, O. M. 1969 The Politics of Untouchability,
Columbia Univ. Press.
- (35) Lynch, O. M. 1972 "Dr. B. R. Ambedkar : Myth and
Charisma" Maher, (ed.), The Untouchables in Contem-
porary India, Univ. of Arizona Press, pp. 97-112
- (36) Parry, J. P. 1970 "The Koli Dilemma", Contribu-
tions to Indian Sociology, vol. 4 pp. 84-104
- (37) Hardgrave, R. L. 1969 The Nadars of Tamilnad,
California Univ. Press
- (38) Pocock, D. F. 1972 Kanbi and Patidar : A Study of
the Patidar Community of Gujarat, The Clarendon Press
- (39) Alexander, K. C. 1968 Social Mobility in Kerala,
Deccan College
- (40) ディカルナは他州の民衆が何を「社会運動」
といふか――(著・K. C. Alexander) G-11 脳構
成図(ヘンチャルト・カルバント)は、アーバン化
した(ef. Mukherjee, 1970 "Class, Caste and Politics in
Calcutta, 1815-38", Leach (ed.) Elites in South Asia,
Cambridge Univ. Press, pp. 33-78)
- (41) Sanyal, H. 1981 Social Mobility in Bengal, Papyrus
Publishers.
- (42) Bhatt, C. 1979 "Reform Movements among the
Waddars of Karnataka", Rao, MAS (ed.) Social Move-
ments in India, South Asia Books, pp. 169-190
- (43) 三田 錠治「カースト運動」『トキウ
』1980, No. 10 pp. 1-25